

導入資料②：広義の福音主義創造論の捉え方① 2012KBIシンポジウム資料より

	プレ・モダニズム -1789	モダニズム 1789-1989	ポスト・モダニズム 1989-
Joseph Clair "Christian Thought" course at Wheaton College	<ul style="list-style-type: none"> Pre-critical Naivete 批評的研究方法以前の素朴さ 	<ul style="list-style-type: none"> The Critical-Thinking Desert 批評的研究方法の無味乾燥さ 本文・文献批評、様式史・編集史批評、歴史的・比較宗教批評、構造・読み手応答批評等 	<ul style="list-style-type: none"> Post-critical Naivete 批評的研究方法以後の素朴さ クラウス・ヴェスターマン
啓蒙思想下での学問研究の進展と、創造の物語の解釈の複雑化・多様化 R.Webber "The Younger Evangelicals",他	<ul style="list-style-type: none"> アダムとエバは即座に創造。 神は文字通りの七日間で世界を創造。 	<ul style="list-style-type: none"> 天文学(天動説⇄地動説) 地質学(地球の年代) 生物学(進化論の問題) 人類学(人間の起源) 心理学(人間観の問題) 精神医学(精神の健康の問題) 	<ul style="list-style-type: none"> 創造の起源は神秘、創造の説明は讃歌。 有神論的進化論(神によって引き起こされた進化)は、科学の領域で働いている福音主義者。 創造の物語は神話。
創造の年代 M.J.エリクソン 『キリスト教神学』第18章 神の原初のみわざ：創造	<ul style="list-style-type: none"> アッシャー主教「一日は24時間、天地創造はBC4004年」 	<ul style="list-style-type: none"> 現代地質学の発展—層序地質学者 W.スミス(1839没) C.ライル(1875没) 放射性物質の特徴による地質年代測定法 地球の年齢—数十億年、おそらく50-60億年、もしくはそれ以上 	<ul style="list-style-type: none"> 断絶説 洪水説 理想上の時点説 日を絵画的にとる説

導入資料③：広義の福音主義創造論の捉え方② 2012KBIシンポジウム資料より

(保守的) 右派	中道右派	中道左派	左派(革新的)
<ul style="list-style-type: none"> アッシャー主教 ファンダメンタリズム ヤング・アース派 ヘンリー・モリス「創造科学」 	<ul style="list-style-type: none"> ヤング・エヴァンジェリカルズ オールド・アース派 エリクソン「漸進的創造論」 	<ul style="list-style-type: none"> 科学の領域で働いている福音主義者。 コリンズ著『ゲノムと聖書』 	<ul style="list-style-type: none"> ポーキングホーン著『科学者は神を信じられるか』他、邦訳多数。 ランドン・ギルキー ヤンガー・エヴァンジェリカルズ
<ul style="list-style-type: none"> 「一日は24時間、天地創造はBC4004年」 創造の物語を科学的次元で取り扱う 	<ul style="list-style-type: none"> 創造の起源は神秘、創造の説明は絵画的描写—神学の専門家として、神の聖定・撰理の内容を科学的学識と関係づける 	<ul style="list-style-type: none"> “バイオ・ロゴス”有神論的進化論(無神論的進化ではなく、神によって引き起こされた進化)—科学の専門家として神の聖定・撰理の内容を科学的学識でかたちづくる 	<ul style="list-style-type: none"> 創造の物語は神話的描写。 クラウス・ヴェスターマン
<ul style="list-style-type: none"> 極端に一字一句字義通りに解釈 信仰が科学に勝る 科学との対決的姿勢(対決型) 	<ul style="list-style-type: none"> 創造物語を軸に、科学との対話(対話型) 科学が神の助けを必要とする 	<ul style="list-style-type: none"> 科学的知識を軸に、神学と対話(対話型) 科学が信仰と調和する 	<ul style="list-style-type: none"> 科学“How”と信仰“Why”の明確な役割分担をする(分離型)

導入資料④：広義の福音主義創造論の多様化の様相
象と五人の目の見えない人

象とは、壁
象とは、ロープ
象とは、柱
象とは、うしろの動物
象とは、腕の動物
象とは、蹄の動物
象とは、柱の動物

「ポストモダン神学がどうしても受け入れ、また利用しなければならない一つの洞察は、我々がある特定の観点から研究と思索を行っており、このことは我々の理解の範囲にある制約を設けているという事実である」『キリスト教神学』p.190

導入資料⑤：クラウス・ヴェスターマン
キリスト教人名事典等より

- Westermann, Claus 1909.10.7-
- ドイツの旧約学者。ベルリンに生まれる。
- 1936-52年の間牧会に従事、その間1940-45年兵役に服する。
- 1949年ベルリンの教会立神学大学の旧約学講師、52年同教授、58年からハイデルベルク大学教授。
- 1949年詩篇の研究「詩篇における神賛美」でチューリヒ大学から神学博士号を受ける。
- 邦訳著書に、『創世記Ⅰ・Ⅱ』（コンパクト聖書注解）、『詩篇選釈』教文館、『千年と一日』聖文舎、『聖書の基礎知識：旧約篇』、『旧約聖書解釈学の諸問題』日本基督教団出版局、『論争された聖書』、『創造』（現代神学の焦点7）、『預言者エレミヤ』新教出版社。
- 邦訳著述に、『旧約新約聖書大事典』の「詩篇」と「預言書」の項目を執筆。

導入資料⑥：今回のテーマに関する C.ヴェスターマンの著書と邦訳書の紹介

- 『創世記』I、山我哲雄訳一特に、「まえがき」「創世記という書物」「創世記1-12章 原初史」の「序論」「世界の創造 Gen.1:1-2:4a」「人間の創造と人間の限界 Gen.2:4b-3:24」、「原初史の結びに当たって」「訳者あとがき」
- 『創世記』II一特に、「訳者あとがき」
- 『創造』現代神学の焦点7、西山建路訳一特に、「緒論」は18世紀以降の啓蒙思潮を背景としての自然科学の発展と史的・批評的な旧約聖書研究の進展の経過の説明が明解、そのコンテクストにおける伝統的な「創造の物語」解釈の再検証とポスト・クリティカルな時代における新しい解釈の提言をしている
- 『旧約聖書解釈学の諸問題』（論文集）時田光彦訳、その中のヴェスターマン論稿「旧約聖書の解釈—歴史的序論—」は、歴史的文脈の中における「旧約聖書の理解と解釈」の課題を的確に指摘している
- 『論争された聖書』西山建路訳一特に、「はしがき」「問いかけられる聖書」
- 『千年と一日—旧約聖書と現代—』岩崎修訳一特に、「序論」「原始史」の中の「五書の成立」「創造についての二つの記事」「創造と自然科学」
- 『聖書の基礎知識—旧約篇—』左近淑・大野恵正訳、特に「まえがき」「全体としての聖書」「五書」の中の「原始の物語 Gen.1-11」
- 『詩篇選訳』一特に「概説」の中の「詩篇とは何か、詩篇の成立、詩篇の収集、詩篇の種類・類型、詩篇の宗教的背景、詩篇と祈りの歴史の関係、詩篇文学の様式、詩篇は語られたのか・歌われたのか」、「叙述的ほめたえ」の中の「詩篇33篇 6-9節の解説」、
- 『旧新約聖書大事典』教文館の中の、「詩篇」「預言書」の項目
- Claus Westermann "Genesis 1-11" Fortress Press の中の、Preface, Introduction to the story of the Primeval Events: Gen.1-11, The Creation of the World Gen.1:1-2:4a, The Creation of Man and Woman and the Expulsion fromParadise: Gen.2:4b-3:24, The Formation and Theological Meaning of the Primeval Story

導入資料⑦：C.ヴェスターマンと聖書批評学

- クラウス・ヴェスターマン著『創世記I・II』は、教文館の「コンパクト聖書注解」シリーズの一冊である。オランダの聖書注解シリーズが、『創世記』に関しては例外的にオランダ人の著者によるオリジナルな書き下ろしでなく、ドイツ人によりドイツ語で書かれた書物のオランダ語版を取り入れているからである。
- そして、元になったドイツ語の書物が、ドイツのノイキルヘナー社から「聖書小文庫」シリーズの一巻として出版された、クラウス・ヴェスターマンの『はじめに—モーセの第一書』なのである。
- この書物は、著者の「まえがき」にもあるように、同じノイキルヘナー社から出ている創世記注解の決定版としての定評を得た、ヴェスターマンの総ページ数千八百ページを越える三巻の大著『創世記注解』（以下、BKと呼ぶ）を一般読者向けに簡略化・要約した短縮版であり、その聖書本文の訳はごく一部の例外を除いてBK通りであり、釈義に関してかなりの部分は、BKの記述のエッセンスをそのまま転用している。
- 「コンパクト聖書注解」の第一回配本書である『ガラテヤ人への手紙』注解への「あとがき」で、登家氏はこのシリーズ全体の特色に触れ、そこにオランダの「保守改革派」の教会や神学の伝統が反映していることを指摘しておられる。
- ルター派の系統に属するドイツ人ヴェスターマンは、同時に、ケールハルト・フォン・ラートやハンス・ヴァルター・ヴォルフらと共に、いわゆるハイデルベルク学派の中心として「歴史的・批判的研究」の本流を歩む、ヴェルハウゼン以来のドイツ旧約学の伝統を最も色濃く体現する旧約学者の一人であり、この意味で「保守的」でも「改革派」的でもないからである。
- このような伝統や方向性や書物の性格・特色の相違にもかかわらず、オランダのシリーズが自前の著者によるのではなく、あえてヴェスターマンによるドイツ語原書の採用に踏み切ったことは、この書が創世記注解として、そのような教派的相違や対立を越えた普遍的な意義と重要性を持っていることを図らずも証明しているように思われる。また、編集者たちのそのような決断には、オランダの教会・神学界の懐の深さが示されていると言えよう。

導入資料⑧：C.ヴェスターマンの“創造の物語”解釈
の導入的紹介：包括的なコンテキストの理解

○木幡藤子氏の以下の著述、翻訳書等は大変助けになる

1. 『現代聖書講座』第二巻、木幡藤子論稿「文献研究としての旧約学の諸方法」
2. 木幡藤子論文「最近の五書研究を整理してみると」
3. 『旧新約聖書大事典』－「様式・類型」「様式史」の項目
4. W.H.シュミット著、木幡藤子訳『旧聖書入門』上・下－特に、「旧約聖書の統一性を問う－旧約聖書神学というものの諸相」等
5. W.H.シュミット著、山我哲雄訳『歴史における旧約聖書の信仰』－特に、「創造」と「結論－受容と同化」の項目

序：Why? Now

ヴェスターマンの“創造の物語”解釈を扱うのか？

①エリクソン神学の視点から

1. 神学の定義：
 1. 第一義的に聖書を基盤として、文化一般の文脈の中で、今日的な表現を用いて、生の諸問題に関連づけながら、キリスト教信仰の諸教理についての首尾一貫した言明をするべく努める学である。P.17
2. 聖書解釈方法論
 1. 「聖書の批評的研究」：聖書批評学はその成果において否定的である必要がない。P.120
 2. 「神学とその言語」：宗教的言語は幅広い総合的体系によって認識上意味ある。P.146
3. 啓示論
 1. 靈感：聖書記者たちに対する聖霊の超自然的影響を意味する。そのことによって、彼らの文書を啓示の正確な記録とし、また彼らの書いたものを実際神の言葉であるように結実させたのである。P.254
 2. 無誤性：それが書かれた時代に文化と伝達手段がどれくらい発達していかとを考慮に入れて、またそれがどのような目的で与えられたものなのかという視点で正しく解釈するならば、すべての記述において完全に真実である。P.295
 3. 権威：これについては、歴史的な権威と規範的な権威を区別することが必要である。聖書には聖書時代に入々に何を命じたかということと、我々には何が期待されているかということが記されている。P.326
4. 神論－創造
 1. 単純にプレモダンの時代に戻るのではなく、真剣にポストモダンの見方に備える。我々の神学の内容はプレモダンの神学の内容と大差ないかもしれないが、モダンの時代を通過しており、モダンが導入した幾つかの変化を無効にできないし、またそのようにすべきではない。...地質学が地球年齢にある程度の知識さえも与えないかのようにして、神学することはできないし、そのようにして神学する必要もないのである。P.187-188
 2. 創造の年代：我々は独断的であってはならない。宇宙の年代は、継続的な研究と思索を要するテーマである。P.151

序：Why? Now
ヴェスターマンの“創造の物語”解釈を扱うのか？
②宇田神学の視点から

1. 我々の神学研究が「井の中の蛙」であってはならない！
→ 「創造の物語」解釈に関する今日の神学的状況と動向に関する分析と情報の提供
2. 我々の神学教育が「空を打つ拳闘」であってはならない！
→ 「創造の物語」解釈に関する注目すべき問題点と主要な争点の指摘
3. 我々の宣教が「聖書的・公同的・今日的・自己革新的の四要素をもつ、真正な福音主義的内容」をもつものでなければならない！
→ 「創造の物語」解釈に関する福音主義教会の核をなす信念体系の確認と一層の掘り下げへの呼びかけと材料

本論：What?-ヴェスターマンの“創造の物語”解釈
—著書『創造』-「緒論」の分析

1. Pre-Critical Naiveteの下に、
Constructされていた“創造の物語”解釈
2. Critical Thinking Desertの下に、
De-Constructされた“創造の物語”解釈
3. Post-Critical Naiveteの下に、
Re-Constructされた“創造の物語”解釈

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 序①		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
聖書における創造の言葉－ 現実の出来事についての報告	<ul style="list-style-type: none"> 自然科学の出現－動揺－ 世界像の変遷 自然科学の称揚と聖書 的・教会的伝承へのくお 伽嘶>嘲笑 科学的説明の戦勝行進 	
	<ul style="list-style-type: none"> 聖書の伝える創造の記事 －自然科学とは何の関わり りもない 宗教・信仰・救いに関する 言説が問題 防御的・弁明的な姿勢 	
	<ul style="list-style-type: none"> 近代神学－人間に集中－ 実存主義的解釈 創造者と創造に関する説 話－聖遺物崇拜のよう 	

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 序②		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> 新しい、人間に集中した神学 神学の人間学への漸進的変化 	
	<ul style="list-style-type: none"> 神学の内部からの解消運動 創造者と創造に関する説話－蒸発・解消し始めたところ に出発点 	
	<ul style="list-style-type: none"> 神学と教会の宣教－科学的説明に－防御的に立ち向かい 創造者の聖書的説話－新たに現在化して対抗しなかった 	
	<ul style="list-style-type: none"> 神学と教会の宣教－救いのみ、罪の赦し、義認のみ 「創造」の領域に「科学」 現実から孤立されられた救済信仰 神は全現実に関わるのか、関わらないのか 神はいるのか、いないのか 	

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析
序③

Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> 自然科学の開発時－拒否した場所－何があったのか 有罪判決－創造者と創造に関しての硬化した、聖書にそぐわない理解が働いた 	
	<ul style="list-style-type: none"> 創造を物語り、創造者を讃美する⇒創造に関するひとつの教説を造った 聖書における創造者と創造の説話のひどい誤解 	<ul style="list-style-type: none"> 創造説話の特徴－いろいろの立場から、いろいろの表現が可能
	<ul style="list-style-type: none"> 創造について聖書の言っていること⇒救いの言説に必要と見えたテキストに矮小化－創造と墮罪 	

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析
序④

Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> 創造に関する聖書の語り方－神は世界（人間）を造られたと物語り－それに対して神讃美をもって応える
		<ul style="list-style-type: none"> 聖書－創造を信じるという文章なし 旧約聖書－創造者への信仰、言い表されていない
		<ul style="list-style-type: none"> 旧約聖書の人々－他の可能性はなかった 神から備えられた現実以外の現実は全然なかった
		<ul style="list-style-type: none"> 我々とは違った現実理解をもっていた－彼らの思惟の前提 それゆえ、信じることはいらなかった

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」の分析 本論 a-①		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • 神がどのようにして世界を造られたのか—信仰の問題ではなかった—いろいろの意見を持ち得た • 創造と創造に関する説話—多数の声が聞こえる—一度限りに確定されたのではない • 旧約聖書—ひとつの創造記事ではなく—多くの記事がある

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」の分析 本論 a-②		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-
<ul style="list-style-type: none"> • 古代の理解—創世記1-2章—ひとつの関連した報告 • 世界と人間の創造 (1: 1-2: 4b)、次に人間の創造の詳細な報告 (2: 4b-24) 	<ul style="list-style-type: none"> • 史的・批評的旧約聖書研究の時期—二つの記事は二つの異なった源泉 • (1: 1-2: 4b) —後代のもの—P: 祭司文書 (前6-5c) • (2: 4b-24) —古いもの—J: ヤハウィスト (前10-9c) • 旧約聖書における創造者と創造に関する説話—学問的研究の第一歩 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 二つの創造記事—二つの文献的源泉に分ける—旧約の文献的批評的研究—一般の最も重要、かつ最も確かな成果 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 古代のイスラエル—創造についていろいろな時代に—いろいろに言い表すことができた • 旧約—ただ一度に確定された創造教説知らず—創造説話は変遷しえた 	

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」 の分析 本論 a-③		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> • 双方の記述の最も際立った相違—創造の様式の相違 • 古いもの—製作—人間を泥から形造り—女を肋骨から形造る • 新しいもの—言葉による創作—彼は言われた、そしてそのようになった 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 文献的研究—伝承史を貫いて推し進められた • 伝えられている文献的テキスト—口伝による長い前史 • 我々の出会う文献的源泉—ひとつの長い伝承過程の最後の段階 • 新たに探究されるべきもの 	

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」 の分析 本論 a-④		
Pre-	Critical Thinking Desert	Post-
	<ul style="list-style-type: none"> • 創造者と創造に関する旧約聖書の説話—基本的に変遷 • イスラエル—ふたつの創造記事のみではなかった • 伝承の歴史を貫いて長い系列—前後左右に並存—たくさんの叙述—創造の物語の叙述 • いつも新しい形態をもっていた 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 著者がインスピレーションにより書き下ろしたものではなく—伝承の長い連鎖—受ける者であり—受けたものを新しい形態にして—次に伝える者 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 言葉による創造の中に—背後に古い叙述 • 古い創造記事—長い前史からの成長 	
	<ul style="list-style-type: none"> • その痕跡—聖書の最初の三章に囚われず • 旧約の多くの箇所から—他のテキストのかなりの系列—詩篇、ヨブ記、第二イザヤ、知恵文学 • 創造者と創造説話の伝承史—再構成の可能性の充溢した資料—様式・編成の富 	

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 本論 b-序 a		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> • 第二の効果—創造者と創造説話の環をさらに広げる • それは本来、信仰の問題ではなかった • イスラエルの生きていた世界—周辺世界・その前世界とから—無条件の分離見えず 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 創造者についてどのように語るか—語り方にはいつも限度あり • しかし、創造者と創造説話—その周辺世界と結びついていた • イスラエルに隣り合い—あらゆる民族に共通したもの—人間は神の被造物・世界は神の創造物 	

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 本論 b-序 b		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> • 我々の状況—創造信仰—最も鋭いコントラストの対象 • 無神論的・反キリスト教的宣伝—創造信仰に焦点 • 神を論難—創造者を論難 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 聖書の発言—決定的な論争点 • かつては—論争点になりえなかった • 神の民—他の諸民族—本質的なところでひとつであった 	
	<ul style="list-style-type: none"> • キリスト教的・教会的伝統—調子があわない • この点に論議が集中—聖書からすれば—必然的でも、正しくもない • 教会内部の—キリスト教神学内部—誤った発展 	

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」 の分析 本論 b-①a		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> 創造者と創造説話ーイスラエルの周辺世界・イスラエル以前の時代の聖書以外の創造者・創造説話ー多様な関連 関連研究ー二つの段階が区別 聖書内部での説話探求ー二つの段階 	
	<ul style="list-style-type: none"> 創造者・創造説話ー聖書のみでないー地上のどこでも、世界と人間について キリスト教神学と聖書テキストの釈義ーほとんど問題にせず 	
	<ul style="list-style-type: none"> ローマ1:18-20 原啓示ー異邦人には蔽われ、歪められているがー残滓あり 歪められ腐っているがー地上の多くの民族にー創造は知られている 	

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」 の分析 本論 b-① b		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> 古代イスラエルの近傍ー聖書の創造記事・聖書の洪水記事ー不思議に似通ったテキストの発見 聖書とバビロニアの創造記事ー相互関係・依存関係 どちらが古いのかーバイブル・バベル論争 	
	<ul style="list-style-type: none"> バビロニア・テキストー聖書テキストに依存すること不可能 聖書テキストーバビロニア・テキストに依存ー可能性あり 	
	<ul style="list-style-type: none"> 多くの解釈者ー聖書テキストの神学的優越性ー弁護的立場 聖書テキストと非聖書的テキストー比較・価値づけ 聖書テキストの絶対的妥当性ー捨て去ることに 	

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」 の分析 本論 b-② a		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> • 聖書以外の創造言表の探究 • 第一段階－聖書外の平行記事－余儀のないところ、見逃すわけにはいかないところのみ引用 • ひとつの聖書外テキストとひとつの聖書テキストの比較 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 比較に際しての誤解・誤った結論を避ける • 聖書外のテキストを孤立させず • 広い関連の中で－それらに固有な関連から理解 	

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」 の分析 本論 b-② b		
Pre-	Critical Thinking Desert	Post-
	<ul style="list-style-type: none"> • ここで、宗教史学、オリエント学、神話研究における探究－驚くべき仕方で聖書学の問題を引き出した • 聖書の創造記事と比較していたテキスト－長い分岐した歴史 • 歴史の中に－幾つもの創造物語の形成 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 創造をモチーフにする物語の歴史 • 早期スメル－バビロニア－アッシリア－ギリヤ語で書かれた後期の複本まで • 開けた展望－始まったばかりの伝承史の探究 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 聖書の創造記事の研究状況－一挙に変えられた • 聖書の創造記事の意味と重要性－強力に拡大 	
	<ul style="list-style-type: none"> • 創世記1章のテキスト－バビロニア叙事詩『エムナ・エリシュ』のテキストの関係－局限され、実り乏しい問題 • スメル・バビロニア・アッシリアのテキスト－重なり合っていて • 何千年にもわたる創造説話の歴史－聖書の創造説話－その全展開にどのように関係 	

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 本論 b-②c		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> その環—さらに拡大 エジプトのテキストに著しい平行記事—メンフィス聖所のテキスト 言葉による創造—世界の創造 	
	<ul style="list-style-type: none"> 地中海世界の高度な文化の創造伝説 その根源をさらに古い伝説・原始文化にさかのぼる伝説をもつ 砂泥・粘土・土から人間が造られたという記述 息によって生きたものとなる 	
	<ul style="list-style-type: none"> スメル・バビロニア神話—非常に多くの原始的創造物語 この著しい合致—どう説明すべきなのか 	

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 本論 b-②d		
Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
	<ul style="list-style-type: none"> この合致—二、三の際立った類似性にとどまらず 始原に起ったこと、原事件—創世記1-11章の創造史 この物語のモチーフ—全世界に広がっていた 	
	<ul style="list-style-type: none"> 創造と洪水の物語—すべての大陸の諸民族の早期に見いだされる 他の事件にも H.バウマン著『アフリカ諸民族における人間の創造と原始時代』—最初の罪過、死の成立、文化成立、兄弟殺し、塔建設のモチーフ 	
	<ul style="list-style-type: none"> 原始時代に関する物語—人類共通のものが横たわっている 早期の時代—全地の種族、民族、人間集団には共通であったある理解 後代の発展段階—人間の精神文化—相違・懸隔 	
	<ul style="list-style-type: none"> 原始時代の物語—共通の思考、共通の理解という基底 どのようにして—これらの原始物語は成立したのか 	

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析
本論 b-② e

Pre-Critical Naivete	Critical Thinking Desert	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • 事情はこういうことである • 全地上に広がっている洪水の物語—祭の儀式で朗詠される物語 • 新たな洪水を避け、新たな洪水から守護するもの
		<ul style="list-style-type: none"> • バビロニアの創造神話—新年の祭りで朗詠—世界新生に役立った • 原始神話の創造者と創造の説話—源泉において、脅かされた世界—脅かされた人間の説話 • 創造神話—世界維持と生存確保の機能

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析
本論 b-② f

Pre-	Critical	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • 創造者と創造の説話の把握方法—根本的に改められる必要 • 創造説話—「どこから」という問いへの答え • 第一原因を問う人間知性への問い—世界はどのようにして、人間はどのようにして生成したのかへの答え
		<ul style="list-style-type: none"> • 創造物語—伝承史の二段階 • 源泉において—世界において脅かされている人間が語った—背後に実存の問題 • 後代の段階—その由来に興味を
		<ul style="list-style-type: none"> • 創造信仰の近代の論争—一体どうということなのか • 世界—聖書と教会が言うようにした成立 • 自然科学の言うようにして成立
		<ul style="list-style-type: none"> • この論争—創造に関する説話の源泉的意義—誤解 • 攻撃側も、弁護側も—源泉的意義を誤解 • 論争自体—無意味 • 創造の現在における意味を問う問い—全く新たに立てられなければならない

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析
本論 b-②g

Pre-	Critical	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • 物語と行動の結びつき－神話と祭儀の結びつき • 原始時代の物語の本来の源泉的な意義を解明 • 神話の積極的意義の再発見－新しい宗教史学研究の成果
		<ul style="list-style-type: none"> • 当初、神話－異邦の多神教の地域に郷里－そこで形成された神々の物語 • キリスト教的西洋で拒否
		<ul style="list-style-type: none"> • 啓蒙期以来－神話vs歴史－出来事の神話的記述（非歴史的）vs歴史的記述－神話的＝非現実的、非歴史的、真実でないものの標識

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析
本論 b-②h

Pre-	Critical	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • こういう観点のもと • 神話と神話的なものの概念－聖書学の中に入り込む
		<ul style="list-style-type: none"> • 新約聖書解釈の手続き－ブルトマンの非神話化で特別な役割 • 概念－否定的意味－神話とは、偽り・克服されるべきもの・取り除かれるべきもの
		<ul style="list-style-type: none"> • 神話の本来の意義－源泉的な機能は問われず • 神話的なものの徹底的拒否－この問い問われず
		<ul style="list-style-type: none"> • この非神話化－NTの前提としての神話的世界像が大切 • 非神話化の手続きにおいて－第二の段階－世界・人間の由来を説明する知性の段階からしか知らず • 前期の段階について－なにも知らず

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」 の分析 本論 b-② i		
Pre-	Critical	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • 神話について新たに得られた理解-状況を一変させた • 神話vs歴史→誤解に至る • 神話-源泉的に-生存を護る-実存的理解-危急にある実存の自己理解
		<ul style="list-style-type: none"> • 創造の説話-世界と人間が危急にさらされている時-存在者が存在するに至ったその始原を物語ることにより-繰り返す • 始原と結びつく-世界の根拠と結びつく • 始原に生じたこと-繰り返して現在化する-世界が成り立っている現実を再び採り出すことを意味

C.ヴェスターマン著『創造』 「緒論」 の分析 本論 b-② j		
Pre-	Critical	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • 神話-現実についての説話-現実にあったことについての叙述 • 人類の早期時代にふさわしい生存理解と世界理解 • 神話vs歴史-神話=虚構vs歴史=現実-この扱い方自体が非歴史的
		<ul style="list-style-type: none"> • 人類の早期の時代-現実的なもの-言語で述べるのに他の方法なし

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 本論 b-②k		
Pre-	Critical	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • そのような理解に立ってはじめて—聖書の原始史を理解する道—創造者と創造に関する説話への道が開かれる
		<ul style="list-style-type: none"> • なぜ聖書は創造教説と創造者教説を知らず—なぜそれを物語ったのか—理解 • ただ物語ることに—朗詠することにおいて—創造は繰り返し現在化され • ただ物語ることに—創造は現実的となる
		<ul style="list-style-type: none"> • 我々の聖書の中に—早期の段階の創造物語が保存 • 後代の時期—後代の人々とあの早期の段階の関連が保たれている
		<ul style="list-style-type: none"> • 聖書の創造物語—人類の歴史—連続量として—意味深い関連 • 現実理解—人類の早期の時代における生理解—世界理解—未来のために保たれる

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 本論 b-②l		
Pre-	Critical	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • 聖書にある創造者と創造に関する説話—新しい意味を得た • 神話的段階に—前向きに進む知性の問いによって規定された段階が続く • 脅かされた世界—脅かされた人間の問い • 始原と終末についての問い • 生成と滅亡についての問い • 限界づけられた人間—限界について問い—その限界を乗り越えて—人間の成立について—世界の成立について問うた
		<ul style="list-style-type: none"> • この知性の問い—それ自身の中に—現在実存する者の根拠と支点である始原について問うところの • 脅かされた実存における脅かされた人間の源泉的な問いを伴っている
		<ul style="list-style-type: none"> • 実存する者の根拠と支点についての源泉的な問い—全人類に共通—すべての人種、文化、宗教を通じて見つけられる • それは—人間存在に属する

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 本論 b-②m		
Pre-	Critical	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • 第二の段階入って—どこからという知性の問い • この段階—知vs信、宗教vs哲学の分裂はじまる • 創造者と創造に関する説話—まだ分裂のかなたにあり • 宗教vs科学、知識vs信仰—それ自身の中に引き離されないままある
		<ul style="list-style-type: none"> • 聖書の創造物語—原始時代に関する説話（Gen1-11章）の本来の意味 • ひとつの完結した全体として人類史の想起 • 現在の人類—人類史の成員として理解
		<ul style="list-style-type: none"> • 人間存在にとっての決定的なモメント（契機）—人類に共通であること—あらゆる人種、民族、人間集団 • 決定的な姿において—世界における人間として自らを理解すること • 宗教、世界観、哲学、イデオロギー—同じ問いに対する同じ答えに根差している始原に帰還する • あらゆる未来のために確立

C.ヴェスターマン著『創造』「緒論」の分析 本論 b-②n		
Pre-	Critical	Post-Critical Naivete
		<ul style="list-style-type: none"> • 聖書の最初の11章—全体についてのこの問い • 始原と終末への問い—何千年にわたる伝承から集約—神の民の歴史に中心をもつ—人類の歴史についての問いと結びき
		<ul style="list-style-type: none"> • 創造と始原時代の聖書的説話の特殊性と唯一性—この結合にある • 聖書の第一章—モーセ五書—トーラの構成部分として起草 • モーセ五書の中心—イスラエル史の基礎—エジプトからの解放・シナイにおける神との出会いの記事
		<ul style="list-style-type: none"> • その構想の大胆さ—小さい民の限られた歴史—世界と人間とを造ったその同じ神の導き・救い・保護の歴史として—述べられている点にある • それによって—創造と始原時代の説話—神の働きの最も広い地平 • 彼らの救い主としてこの神に出会った者たちによって経験・証言された—神の働きの地平
		<ul style="list-style-type: none"> • 神の大いなる行為の経験—罪の赦しのドラマ—高さ・深さ—神の言葉と人間の応答 • 神の小さき民の道—人類における—また宇宙における神の働きから出ている • その道—もう一度—神の普遍的働きに還流する

結語：How?-ヴェスターマンの“創造の物語”解釈「緒論」をどう評価するのか？

①物語神学の効用

- 物語神学の立場を簡潔に表現するならば、聖書の**歴史的文献的成立過程**を遡行的かつ通時的に探究してきた近代の歴史的・批評的研究は、教会に**聖書の正典“際限なき断片化”**、いや**“解体”**という**危機的現実**を突きつける結果となった。そのため今日では聖書を正典として読む読み方が崩れてしまい、聖書が教会から奪われてしまったのである。...このような事態は、リベラリズムによる「近代性」あるいは「現代性」への還元の方法の結果とその限界とを示す。
- 物語神学は、こうした**重大な“行き詰まり”**の状況を深刻に受けとめ、その超克の道を探るのである。具体的には、聖書を字義的にとったり、命題的な真理を強調する伝統主義への復帰ではなく、新しい道を求める。それは、「物語」という“新しい文学的ジャンル”に着目し、それによって見失われてきた**聖書の“総体”**、あるいはある種の**“統一性”**というものと、聖書のインパクト、あるいは**“メッセージ性”**とを取り戻そうとする、一つのポスト・モダン的な試みである。
- 近代は、“科学的な知”のあり方を万能として、“物語的な知”のあり方を前近代的なもののみを排除してきた。しかし、ポスト・モダンの立場から**“物語的な知”の復権**が叫ばれてきた。

結語：How?-ヴェスターマンの“創造の物語”解釈「緒論」をどう評価するのか？

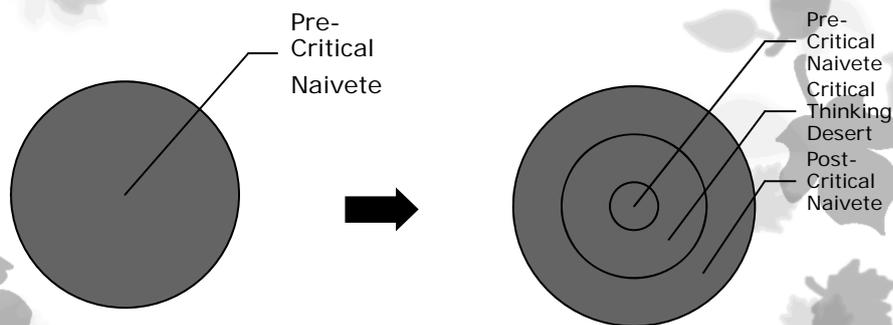
②物語神学の結実

- 旧約聖書は、**神とイスラエルの物語**であり、福音書もイエスの人物史ではなく、**イエスとの出会いによってもろもろの影響を受けた聖書記者たちをはじめ接した人々によって語り継がれた物語**である。...また人間の経験は、基本的には物語の形をとって語り継がれる。我々は、まさに物語に囲まれ、物語の中で生活している。
- 本来、キリスト教信仰は、神の存在や神の世界に対する計画などに関する特定の形而上学的教説や世のもろもろの世界観に対抗する一つの世界観でもなければ、また命題的真理や教理の知解とその受容といったものではなく、**個人の生や共同体のあり方を啓発させるところの“生きた信念”**とでも言うべきものである。
- 物語の真理性は史実的歴史の提供にあるのではない。むしろ、それを読む我々を**実存的に照明し、我々を新しい意味、ある枠組みあるいはビジョンに目覚めしめ、我々のうちにそのためのコミットメントと共同体とを生み出し、かつそこへ導くところの作用・効果・影響力**にある。
- また、福音理解と伝達においても、物語は人間の**審美的感性と想像力**をかりたて、あわせて**「絵画的迫力」をもった言語活動の様式**であり、論理実証主義や合理主義による**“理性のパラノイア(編集症)”**がきびしく反省されつつある今日のポスト・モダンの知的状況にもよりマッチする。
- 物語神学は、確かに歴史的・批評的研究の限界と問題性とを再確認しつつ、**物語という文学的・審美的ジャンル**に注目することによって、フォーカスを今一度聖書に集めた。...また、科学的な言語のみを真とする論理実証主義の立場に対し、**...宗教的言語の意義と権利を立証**することになった。

結語：How?-ヴェスターマンの“創造の物語”解釈「緒論」をどう評価するのか？
③物語神学の課題

- しかし、次のような問題性も見落とすことはできない。
- 1. まず、聖書は**神の存在に関する情報**や**世界と人類に対する神の意志・計画**を伝えるものではないと考えている点などから、信仰が内蔵する**形而上学的側面の意味・解明が不十分**ではないかと思われる。
- 2. 次に、聖書を主として**宗教的想像力の啓発と鼓舞**という機能面からのみ扱い、聖書が**人類に対する神的真理に関する預言者的告知の書**であるという側面や、**聖書の普遍的規範性の立証**が欠落しているという問題も認められる。
- 3. そして、神学の概念の問題であるが、物語神学において、神学は**神と世界に関する神の“経綸”の解明と立証**という働きから離れ、特定の信仰伝統に関する一種の**“記述的”な営為**、またその**伝統へのより深い関与を呼びかける“喚起的”な学**にとどまっているという問題も認められる。

結語：How?-ヴェスターマンの“創造の物語”解釈「緒論」をどう評価するのか？
④結び



- ①わたしは、Pre-Critical Naivete の背景の下で、神学教育を受け、伝道・教会形成にあずかってきた。
- ②しかし、長年、神学研究・神学教育に携わる中、特に宇田・エリクソン神学研究的射程に、Critical Thinking Desert の神学研鑽の中の健全な材料を生かし、Pre -Critical Naivete が Post-Critical Naivete を目指して「Construct⇒De-Construct⇒Re-Construct」の作業過程に置かれていることを知った。
- ③わたしは、そのような作業過程の中に身を置いている。そしてその文脈における福音派の「創造の物語」解釈において、ヴェスターマンの取り組みは、多くの建設的な材料を提供しているように思われるのである。

主要参考文献リスト

- クラウス・ヴェスターマン著『創造』：「緒論」
- R.Webber"‘The Younger Evangelicals’"Ch.5
Theology-from Propositionalism to Narative’
- M.J.エリクソン著『キリスト教神学』：第一部「神学方法論」、第二部「啓示論」、第三部「神論」
- 宇田進著『総説現代福音主義神学』「第二部・第四章 ポストモダニズムの挑戦とキリスト教神学の‘脱構築’」等

★なお、この研究発表は20分であるが、関西聖書学院での約120分集中講義DVDとヴェスターマン「緒論」資料は、ICIで2500円（送料込）で提供中。希望者はメールにて注文してください。